

Title	山の人生(柳田國男著, 郷土研究社發行)
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1927
Jtitle	史学 Vol.6, No.1 (1927. 3) ,p.144- 145
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19270300-0144">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19270300-0144</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

れたる人であるから、氏の論者は一層の重きを加へるのである。而して本書は從來公にされたる論文を集めたものであつて、氏が『一個の南島人として、重に内部から南島を觀たもので、いはゞ南島人の精神生活の一記録ともいふべきもので』ある。

まづ『孤島苦の琉球』は、數百年間に亘る南島人の重苦しい歴史をのべたものであつて、吾々が單に空想の上に浮べるところのうるはしい南島の姿とは、全く異つた陰慘な現實の面影であり、さうしてかゝる窮狀に陥つたのは、三百年間に亘る島津氏の擄取政策のためであるとなしてゐる。其他『支那の動亂と琉球の態度』や、『空道について』や、『沖繩縣下のヤドリ』や、『蕃藩民誓約血判書』のごときは、いづれも琉球の特殊の地位狀態から生ずる苦境についての記述である。しかしながら現在の琉球の窮狀は、ことごとく過去の制度や政策にのみ起因するものであらうか。吾々の氣づかない他の自然的原因がないであらうか。制度の罪はもちろんだなるものであらうけれども、其他に氣候風土のごとき自然的環境の影響についても考察する必要はないであらうか。人間の生活は單に人爲によつてのみ支配されず、吾々のあまり意識しない方面において、どれだけ自然の影響をうけるかわからない。人間の心身に及ぼす氣候の影響の大なることは、米國の地理學者ハンチントン教授等の唱へるところであるが、わが南島人もその特殊の氣候風土の影響を、その性格の上に、ひいてはその生活の上にならうてゐないであらうか。『南島の歌謡に現はれた爲朝の琉球落』『古琉球の歌謡に就きて』『祭式舞踊』『琉球古代の裸舞』『渡琉日記を紹介す』、『京太良詞曲集につきて』などは、南島の藝術、

傳説に關する研究であつて、『猿田彦神の意義を發見するまで』、『琉球語の母韻統計』、『琉球語の數詞について』の諸篇とともに、著者の言語學的造詣を示すものである。『琉球史上に於ける武力と魔術との考察』は、その量において書中最も大なるものであつて、かつて本誌第五卷第三號に掲載されたものであるから、こゝに紹介する必要はないが、たゞ氏が武力と魔術との關係を論ずるにあつて、フレイザーの説をその根據としてゐるけれども、氏の説く琉球史上の文化狀態が果してフレイザーの説く場合の文化狀態と適合するや否やの疑問を起させるが、とにかく興味ある力作の論文である。附録の『中學時代の思出』もまた、氏自身にとつてのなつかしき記録であるのみならず、琉球最近世史の一面を物語る貴重な文献である。南島研究者はもちろんのこと、一般讀書界に對して是非本書の一讀をすゝめたい。(松本芳夫)

### 山の人生 (柳田國男著 郷土研究社發行)

國民史或は民族史は、少くともその用意として全體についての考察を怠つてはならぬにかゝらば、普通の場合それは多く征服民族の歴史であり、支配階級の歴史である。しかしながらいつの時代においても、支配者のかげには被支配者があり、特權階級の下には非特權階級が存在するのであつて、複合民族からなる日本においてもまたさうである。今日の日本人が幾多の異種族の混合からなる事は、すでに學界一般の承認するところであるが、しかしその中心要素たる所謂天孫民族と、他の種族との融合關係

は、必ずしもその詳細の點において明確でない。他種族は血統において全く全滅してしまつたか、或は征服民族と融合して現日本人構成の要素となつたか、それとも征服民族とはほとんど關係なしに特殊の生活状態を持續してきはしないか、こゝに歴史上、人類學上重大なる幾多の問題が伏在するのである。しかるに從來の日本歴史においては彼等の運命のごときは考慮されず、その生活が如何なるものであつたかは全く不明と言つていい。少くともこの問題に關して權威ある研究の公にされたものはなかつた。それはその研究の極めて困難のためでもあり、また社會における特權階級の生活研究をもつて歴史の能事終れりとなした誤れる歴史觀のためでもあつた。しかるにこゝに紹介しようとする柳田國男先生『山の人生』一卷は、實にこの問題に關する先驅的著述をなすのである。

著者は吾々が昔話や世間話として單に興味本位にききつばなしにしてしまふやうな巷説民譚から人生の悠久とその忍苦とを考へさうして更に多くの文献を涉獵して、こゝに『山に埋もれたる人生のあること』以下三十編に亘つて、吾々のいまだ知らなかつたさうしてほとんど無關心であつた山の人生を展開し説明したのである。その論斷の卓抜はいふまでもなく、その敘述の巧妙と、その資料の怪奇的性質だけでも、學界はもちろん一般讀書界の注意を喚起するには十分である。たゞ著者のあまりに大なる博學は、時として讀者の注意を多岐に走らせ、從つて自序におけるがごとく『面白さうだが、よく解らぬ』といふ場合もないではなからうと思ふが、しかし問題の中心は常に存在するのである。即ち附録

書 評

『山人考』はその要約とみることができ。著者は現在の日本人が數多の種族の混成であるといふ説から發足し、その先住民族である國つ神が後二つに分れ、大半は里に下つて常民に混同し、残り山に入り、或は山に留つて山人と呼ばれたとみるのである。即ち先住民族の絶滅の徑路を歸服朝貢、討死、自然の子孫斷絶、信仰界を通つての併合、長年月に亘る土著混淆、及び舊狀保持者なる山中の漂泊者の六種に分類し、さうして、わが民間信仰の山の神、中世における鬼、或は天狗の思想、それらと關聯する神隱しの話、かくのごとき神祕的思想信仰の裏に、いかに現實的根據のあること、即ち山人がそれらに關係あることをのべられた。單にこれだけの紹介ではその論旨は徹底せず、また形態的研究をもつて種族判例の唯一方法とみる一派の人類學者からみれば、本書の結論は恐らく危險と思はれるであらうが、たとひ異論ある人々と雖も、わが民間に弘く行はれてゐる思想信仰、或は無言貿易のごとき經濟生活に關しては、つきざる興味と示唆とを與へらるゝのは事實であり、またその自序にのべられた學問に對する著者の主張には、吾々も全く贊同するところである。(松本芳夫)

「哲學」第一輯 三田哲學會發行

哲學が思惟のライスツクであり、其のライスツクが更に思惟自身の發展を要求する限り、其の發展のある程の成果の體系は一の思想として哲學其のものゝ自己發現の體系である。此の思想體系が更に言語の働きに於て發表されたものが即ち哲學に關する